

演題番号：E4

すごろくを用いた食品衛生の啓発及び食育の推進

○井上聡美，宮田風香，福本真子，折目朋子，徳田淳子

大津市保健所

1. はじめに：大津市では、食品衛生啓発として出前講座や手洗い教室、メール配信サービスやSNSを利用した情報提供等を行っている。コロナ禍を経ての対面での啓発手法の見直しや事業の効率化のため、食品衛生啓発と食育をあわせてできる内容のすごろくを作成し、啓発に活用した。

2. 材料および方法：すごろく盤とカード等の付属品からなり、年齢や理解度に応じて遊び方を3つから選べるすごろくセットを、本市のキャラクターを使い作成した。すごろく盤はカレーライスとハンバーグを作る過程での手順や衛生のポイントがゴールまでの道筋となっている。遊び方によっては、食品安全や食育、キャラクターに関するクイズやイベントのカードを用いる。

3. 結果：(1) おおつ健康フェスティバルでの活用：食品衛生と食育コーナーで、市民に体験いただくとともに配布を行った。(2) 市立児童クラブ(37か所)への配布：17クラブからのアンケート回答から、低学年中心に491人が楽しんで遊べ、半数以上のクラブで児童に知識が定着している様子が伺えた。しかし、「手洗い習慣が良くなる、手伝いが増える等、行動に良い変化は見られたか」との問いに「はい」と答えたのは

4分の1程度にとどまった。(3) 小学校への配布：希望があった19校に計111セットの配布を行った。主な使用予定の学年と活動を尋ねたところ、学年や普通級・支援級、学習、遊びを問わず様々な場面での活用が見込まれた。(4) 市民、地域団体等への配布：広報やSNS等で周知を行い、窓口での配布を行った。子どもがいる家庭だけでなく、教育保育関係、地域コミュニティ等、様々な団体から希望があった。

4. 考察および結語：当初は小学生を対象としていたが、4歳ごろから高齢者まで、年代を問わず使える啓発資材となった。「すごろく」という形にしたことで、学びの場に限定されず、遊びの一環として児童や市民が触れる機会をより増やすことができた。1度遊ぶ程度では行動の変容までは至らないようであったため、啓発効果を高めるためには、クイズの内容の変更や増加で繰り返し遊んでもらったり、本市の食品安全リスクコミュニケーションが児童と一緒に遊んだりするような工夫が必要と考える。すごろくはリーフレット配布より啓発効果が高く、出前講座のように職員が出向く必要がないため、今後も活用を継続することで、費用対効果の高い事業となると考える。